

インターハイ入賞者のスポーツ経験と陸上競技の開始理由

渡邊將司
茨城大学教育学部

1. はじめに

選手はどのようにしてトップレベルに至ったのだろうか。それは多くのアスリートにとって大きな関心事だろう。陸上短距離種目で日本代表経験のある選手に対してインタビュー調査をした研究によると、トップレベルに至るまでの道筋は多様だが、いくつかの共通点があることが明らかとなった。それは、幼少期から足が速いということを実感していたこと、中学校期にはスポーツ種目やパフォーマンスレベルは違えども運動部に所属していたこと、高校期には全国トップレベルの成績を収めていたこと、親は彼らのやりたいことを尊重し過剰でない支援があったことである（小林ほか, 2016）。日本代表選手の78.8%は高校期に全国大会の出場経験があり、61.5%は全国入賞経験があった（渡邊ほか, 2013）。したがって高校の全国大会で入賞する選手の特徴を明らかにすることは、高校生競技レベルの向上や競技人口の拡大だけでなく、オリンピックや世界選手権等の国際大会における日本代表選手の効果的な発掘・育成につながる可能性がある。

インターハイ入賞者に対するアンケート調査は2004年度から始まったが、本稿のテーマである運動・スポーツ経験や陸上競技を始めた理由に関する調査は2015年度から加わった。2016年からは年度ごとに集計結果が本紀要に報告されてきたが、ここでは2015年から2019年までに収集されたデータを集約し、インターハイ入賞者の特徴をまとめることとする。なお、各年度に集計された対象者数および総数は表1の通りである。

表1 各年度の人数

	2015	2016	2017	2018	2019	合計
男子	45	15	81	101	50	292
女子	44	17	87	97	55	300

性別が未記入だった3名は除外

2. 経験したスポーツ種目数と肯定感

図1には、これまでに経験したことがあるスポーツ種目数を示した。陸上競技以外のスポーツ経験がない者は13.9%であったが、1～2種目のスポーツ経験がある者が69.1%を占め、3種目以上のスポーツ経験がある者が27.0%であった。このように陸上競技以外の複数の種目を経験している者が多いことがわかる。経験のある種目は、水泳、サッカー、野球、バスケットボール、空手、スキーなど多種多様であったが、陸上競技種目との関連性は見当たらなかった。表2には、多様なスポーツ経験に対する肯定感を示した。79.4%の選手が、「大変役に立った」「役に立った」と回答していることから、多様なスポーツ経験は肯定的に働いていることがわかる。しかし、どのように肯定的に働いているのかは尋ねられていなかったのではわからない。

オリンピックや世界選手権の日本代表選手を対象にした調査をみると、1～2種目のスポーツ経験がある者が69.2%で、3種目以上は8.7%であった（渡邊ほか, 2013）。最近のインターハイ入賞者の方が多様なスポーツ経験があるのかもしれない。また、低年齢期に多様な運動経験をしていることは、オーストラリア代表選手を対象にした研究結果と一致している（Huxley et al. 2018）。さらに、ドイツのスポーツ選手を対象にした研究では、世界大会でのメダリストは国内上位選手に比べて、専門スポーツ以外のスポーツ活動にもより多くの時間を充てていることを明らかにした（Gurich and Emrich 2014）。多様なスポーツ経験は、様々な知覚や運動能力の発達につながるだけでなく、ケガの予防や心身のリフレッシュにもつながるといえる。これらのことから、多様な運動・スポーツ経験は、ハイパフォーマンスに関係している可能性があると思われる。

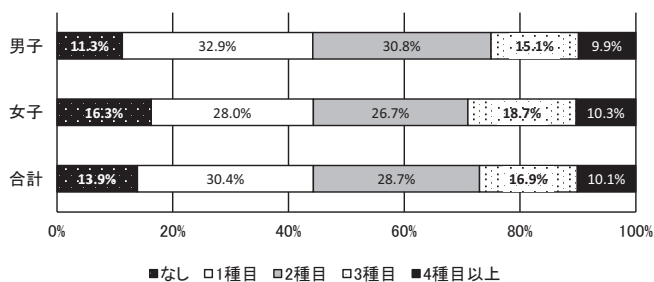


図1 陸上競技以外に経験のあるスポーツ種目数

表2 多様なスポーツ経験に対する肯定感

	男子	女子	合計
大変役に立った	32.3%	43.8%	38.0%
役に立った	41.4%	41.4%	41.4%
どちらともいえない	20.7%	13.1%	16.9%
役に立たなかった	4.4%	1.2%	2.8%
全く役に立たなかった	1.2%	0.4%	0.8%

男子:n=251, 女子:n=251

3. 子どもの頃の運動遊びと運動有能感

表3には、子どもの頃の運動遊びの頻度を示した。84.8%の選手がよく運動遊びをしていた。表4の小学校期の運動有能感をみると、短距離走、長距離走、跳能力において、少なくとも50%以上が優れていたことを自覚していた。

オリンピック・世界選手権の日本代表選手を対象にした調査においても、87%の者がよく運動遊びをしていたと回答した。有能感も同様に投能力以外は周囲の子どもに比べて高かったと自覚していた者が多かった(渡邊ほか 2015)。高い運動有能感を持つことで、より運動に対して前向きになり、体力や運動能力の獲得をより促進する一因となる。走跳投能力は量的な指標で比較されることが多い。体力テストがその一つで、結果が個人にフィードバックされる地域もある。また体育の授業や運動会でも競争する機会はあるし、休み時間等での自由遊びでも何らかの形で他者と比較する機会があったものと思われる。

4. 競技開始の理由

陸上競技を本格的に始めるにあたっての動機(内的要因)といきさつ(外的要因)を尋ねた。表5と表6にはそれぞれの割合を示した。内的要因として最も多かったのは「自分に合った競技だと思ったから」(54.1%)、次いで「楽しそうで面白そうだったから」(46.8%)で、3位以降の理由とは比較的大きな差があった。自分に合った競技だと感じるには

表3 子どもの頃の運動遊び頻度

	男子	女子	合計
よく遊んでいた	84.8%	84.9%	84.8%
普通	13.8%	13.4%	13.6%
あまり遊んでいなかった	1.4%	1.8%	1.6%

男子:n=276, 女子:n=284

表4 小学校期の運動有能感

	男子	女子	合計	
短距離走	速かったと思う	65.3%	81.5%	73.5%
	普通だったと思う	25.0%	14.1%	19.5%
	遅かったと思う	9.7%	4.4%	7.0%
持久走	速かったと思う	50.3%	62.8%	56.7%
	普通だったと思う	30.9%	28.2%	29.5%
	遅かったと思う	18.8%	9.1%	13.8%
跳能力	高かったと思う	53.1%	52.7%	52.9%
	普通だったと思う	36.5%	40.3%	38.4%
	低かったと思う	10.4%	7.0%	8.7%
投能力	高かったと思う	32.3%	34.6%	33.4%
	普通だったと思う	43.4%	36.2%	39.8%
	低かったと思う	24.3%	29.2%	26.8%

男子:n=288, 女子:n=298

比較が必要であろう。様々なスポーツを経験した中で適性を感じたり、仲間と走ったり跳んだりして競う中で自分が優れていると感じることで、適性を感じたのかもしれない。Gurich and Emrich (2014)によると、エリート選手は複数のスポーツを経験する中で、自分に最も合っているスポーツに辿り着いている可能性があるの述べていることから、インターは一入賞者も同様の傾向があると思われる。また、楽しそうで面白そうという陸上競技に魅力を感じていたことも忘れてはならない。陸上競技の魅力の一つに自己記録への挑戦があるだろう。自己記録を更新した時の満足感は、さらなる更新を目指すモチベーションとなるに違いない。また、競争から得られる魅力(勝った時の爽快感や負けた時の悔しさ)もある。

外的要因として最も多かったのは「指導者やコーチにすすめられて」(32.6%)、次いで「先輩や友人にすすめられて」(20.6%)、「学校の先生にすすめられて」(20.4%)であった。指導者と学校の先生を同一人物と捉えている者もいる可能性が高いが、小学校や中学校の頃の先生が、彼らの活躍をみて進学したら陸上競技を始めた方がよいと勧めた可能性も考えられる。また母親や父親からの勧めも18%ほどあった。高い競技パフォーマンスの発揮や競技の継続に、家族の支援が関係していることが示されているが(Bennie and O' Connor, 2006; Huxley et al. 2017, 2018; 渡邊ほか, 2016)、陸上競技を始めるにあたって同様に家族の支援が関係していると言えるだろう。中学生から陸上競技を始めて日

表5 陸上競技を始めた動機 (内的要因)

	男子	女子	合計
自分に合った競技だと思ったから	51.4%	56.7%	54.1%
楽しそう面白そうだったから	40.8%	52.7%	46.8%
ただ何となく	17.1%	14.3%	15.7%
かっこよく見えたから	16.8%	17.7%	17.2%
うまくなれそうだったから	13.7%	14.0%	13.9%
自分を鍛えるのに良い競技だと思ったから	9.9%	5.0%	7.4%
一流選手になれると思ったから	7.5%	3.3%	5.4%
その他	10.6%	13.3%	12.0%

複数回答可 男子:n=292, 女子:n=300

表6 陸上競技を始めたいきさつ (外的要因)

	男子	女子	合計
指導者やコーチにすすめられて	32.9%	32.3%	32.6%
先輩や友人にすすめられて	22.9%	18.3%	20.6%
学校の先生にすすめられて	18.2%	22.7%	20.4%
母親にすすめられて	13.7%	22.7%	18.2%
父親にすすめられて	18.2%	18.3%	18.2%
特にきっかけはない	18.8%	14.3%	16.6%
直接、試合を見て	12.7%	9.7%	11.1%
兄弟にすすめられて	7.9%	13.7%	10.8%
テレビ、新聞、雑誌などの情報によって	7.9%	4.3%	6.1%
親戚にすすめられて	3.1%	1.7%	2.4%
タレント発掘事業に参加して	0.3%	0.3%	0.3%
その他	4.8%	7.0%	5.9%

複数回答可 男子:n=292, 女子:n=300

本代表になった選手も似たように、仲間からの誘い (18%)、陸上競技に魅力を感じたこと (18%)、親や教師からの誘い (13%) がいきさつであった者の割合は比較的高かった (渡邊ほか, 2015)。特に小中学生年代の指導や教育に携わる者は、子ども達に陸上競技の魅力伝えるとともに、進学したら本格的に始めるよう進言することが求められるだろう。また家庭においても、保護者自身が子どもの適性や興味を知るとともに陸上競技の特性や魅力を伝えることが望ましいだろう。

5. 今後の展望

インターハイ入賞者 (毎年のべ424名) に対するアンケートは、表彰式後に案内していた。後日郵送にて回収していたこともあってか、回収率が非常に低いのが問題であった。また、この調査は他の集団 (インターハイ入賞者以外) には実施していないため、得られた結果がインターハイ入賞者の特性なのかどうかわからなかった。今後は、幅広いレベルの選手から高い確率で回収できそうな場 (ブロックや都道府県レベルの合宿など) で実施する必要があるだろう。

今回報告したスポーツ経験や開始の理由に関する調査は基礎的な情報であるが、時代の流れとともに変化する可能性があるため今後も継続すべきであると考え。一方で、新たな課題も浮かび上がっている。例えば2019年度の登録会員数をみると、高校

生が111,691人であるのに対し、大学生20,296人であった。高校卒業後に大学に進学せずに一般登録する者を考慮したとしても、高校卒業後に競技人口が大幅に減少している様子がわかる。また、高校期に好成績を残していた選手でも、卒業後にさらにパフォーマンスを高める選手もいれば、低下する選手もいる。どのような特徴を持った選手が競技を継続したり、さらにパフォーマンスを高めるのかを明らかにするためには、縦断的な調査も必要であろう。

文献

- Bennie A and C' Connor D (2006) Athletic transition: an investigation of elite track and field participation in the post-high school years. *Change: transformations in education*, 9(1): 59-68.
- Gullich A and Emrich E (2014) Considering long-term sustainability in the development of world class success. *European Journal of Sport Science*, 14(S1): S384-S397.
- Huxley DJ, O' Connor D and Larkin P (2017) The pathway to the top: key factors and influences in the development of Australian Olympic and world championship track and field athletes. *International Journal of Sports Science & Coaching*, 12(2): 264-274.
- Huxley DJ, O' Connor D and Bennie A (2018) Olympic and world championship track and field athletes' experiences during the specializing and investment stages of development: a qualitative study with Australian male and female representative. *Qualitative research in sport, exercise and health*, 10(2): 256-272.
- 小林柊次郎, 渡邊将司, 森丘保典, 岩瀧一生 (2017) 陸上競技日本代表選手の競技ヒストリー研究—男子短距離選手を対象にした複線経路・投資性モデル—. 陸上競技研究紀要, 13: 4-10.
- 渡邊将司, 森丘保典, 伊藤静夫, 三宅 聡, 森泰夫, 繁田 進, 尾縣 貢 (2013) オリンピック・世界選手権代表選手における青少年期の競技レベル—日本代表選手に対する軌跡調査—. 陸上競技研究紀要, 9: 1-6.
- 渡邊将司, 森丘保典, 伊藤静夫, 三宅 聡, 繁田 進, 尾縣 貢 (2015) 日本代表選手の青少年期における運動遊び経験およびトレーニング環境—日

本代表選手に対する軌跡調査－. 陸上競技研究紀要, 11 : 4-15.

渡邊將司, 明珍直樹, 上地 勝, 久保佳彦, 森丘保典, 三宅 聡, 繁田 進, 尾縣 貢 (2016) 高校生における陸上競技の継続および非継続に関する要因. 陸上競技研究紀要, 12 : 4-15.